

新聞を読まない我々に忍び寄る未来と 現代の記者が足で稼ぐもの――

栄谷通信

わかやま未来学 公開シンポジウム

「大学と新聞と地域の未来」

木曜 4限 1/19 [木] 14:50~16:20 G102 教室にて

発行：
国立大学法人
和歌山大学
広報室
和歌山市栄谷
930

号外

学ぶ人の減る、大学
読む人の減る、新聞
住む人の減る、地域

パネリスト

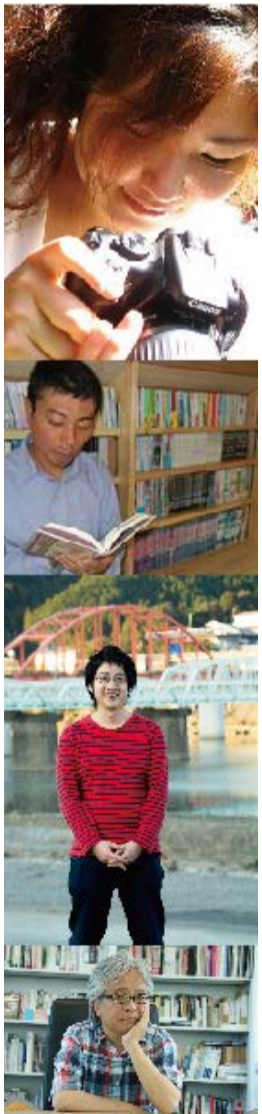
- 万谷絵美 (『和歌山経済新聞』記者、株式会社 Corp 代表)
- 喜田義人 (『紀伊民報』記者)
- 武和楽士 (『熊野新聞』元記者、企画事務所「楽座」主宰)
- 天野雅郎 (『わかうら壁しんぶん』記者)

コーディネーター

- 佐藤祐介 (「教養の森」センター、COC+推進室)

いまジャーナリストにとって現場とは

じもと



この冬最大の寒波が到来した週末、平成二十九年大学入試センター試験が実施された。荒天による交通機関の乱れなどに伴い、試験開始時間の繰り下げ対応をした会場数は「過去十年間で最大の規模」(大学入試センター発表)を記録。各マスコミは管轄地域の担当大学から試験実施の状況を細かく聞き取り、吹雪の会場前から、今年の受験生が体験した2日間を追った。

和歌山大学(和歌山市栄谷)にも、新聞各社や電波メディアが訪れ、初日朝一番の「地理歴史・公民」試験教室を取材した。センター試験の取材は3年連続となるベテラン記者は、小雪がちらついていた2年前を思い出しながら、和歌山では雪の影響がなかったことを我がことのように喜んだ。今年初めてセンター試験の取材に臨んだ新人記者は、数年前に自分が体験した緊張がよみがえり、シャツタミを押す指が一瞬震えた。市内の学校取材が多い教育担当記者は、試験場で見慣れた制服に目を留め、去年取材した高校生に思いを巡らせた。

翌日の朝刊紙面には、和歌山大学の教育学部講義棟2階の一室で試験開始を待つ受験生たちの背中が掲載された。記事は和歌山で受験した人数を紹介した。初日の試験が終了したと、英語リスニング機器の不具合申し出が和歌山県内で1件あったことを簡潔に伝えて結ばれた。

短い記事に込められた記者の密かな思いを受け取っているのは誰だろうか。

「大勢に向けて記事を書く」機会とは別に、地元の人々と直に関わり合う別の活動が始めている記者たちがいる。読書会、まちなかイベント、地元密着フリーペーパー……自分の足で稼ぐのは、記事の「ネタ」だけではないのかもしれない。

ジャーナリストと現場の新しい関係が始まっている予感――手許のスマホに届く「ニュース」を「消費」するだけの自分に不安を抱く和歌山大学のすべての学生、教職員と共に考える機会にしたい。



わかやまで学ぶために 「わかやま未来学」に学ぶ

